二年九月二十日六十四歳を以て歿した。

マキノナリザネ　牧野成賢　初諱は成仁、後仁字を避けて成賢と改めた。字は養潛。彦根侯に仕へ、祿二百五十石を受け、使番を職としたが、延寶四年事に因つて藩士數十人の國を去つた時、成賢も之と行動を共にした。成賢乃ち京に出で、山崎闇齋に學んだが、闇齋の神道に赴くに及んで之に從はず、天和中金澤に來住して大に理學を唱道した。藩老村井親長之を師尊し、宅一區を分かつて安處せしめた。成賢のこゝに在ること十七年、その間羽黑氏を稱し、元祿十年彦根侯の召に應じて歸り、再び牧野左平次に復した。

マキノヒデトラ　牧野秀虎　通稱與左衛門。秀虎の祖父は佐野小八郎といひ、その妻は清泰院夫人の乳母であつた。小八郎の子與左衛門水戸侯に仕へ、その子が與左衛門秀虎で、前田綱紀から三百石を以て召抱へられ、寶永二年に歿した。秀虎の孫金藏良遠、安永年間閉門中に病死して家斷絶した。

マキバナ　牧鼻　鹿島郡能登島なる曲部落の西北方にある岬。

マキヤホシチ　牧八百七　前田治脩の御居間方御歩から新番に上り、寛政十三年新知百石を得、組外に列し、文化二年九月廿二日歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

マキヤマ　牧山　河北郡井上庄に屬する部落。

マキヤマ　牧山　羽咋郡佛木の内の小字。

マキヤマ　牧山　鳳至郡瀧又の部落から西方に在る山。高さ三三六米。

マキヤマ　牧山　鹿島郡南三郷に屬する部落。明治中に至り小栗に併合した。

マギラ　間明　→マアキラ　間明。

マグラジンジヤ　馬鞍神社　鳳至郡三田(今山田)に在つたが、明治四十年山田鄕神社と改稱した。式内等舊社記に『馬鞍神社。山田鄕三田村鎭座。稱二馬鞍明神一。舊社也。』とある。

マゲシバラ　曲子原　河北郡五ヶ庄に屬する部落。

マサカゲ　正景　加賀の刀工。土佐守正景と切る。慶長頃。

マサギミ　榮君　前田綱紀の第六女。初名直姫。元祿六年十月十九日金澤に生まれ、十一年二條吉忠と婚を約し、正德二年七月廿六日入輿。吉忠の母は靈元天皇の皇女で、直姫その猶子となり、榮君の稱を許され、名を利子と改めた。享保五年綱紀の入洛したのは、實に之を訪ふ爲であつた。後元文元年八月廿七日榮君は政所宣下を得て從三位に叙し、寛延元年十二月六日五十六歳を以て薨じた。法號泰眞院政所菅原氏尊儀。榮君に二女があり、その長辰君は正德三年六月三日に生まれて有栖川熾仁親王の妃となり、次の永君は同五年八月廿四日に生まれて櫻町天皇の女御となり、後櫻町天皇を生み奉り、桃園天皇を養子とし給ひ、桃園天皇卽位の後尊んで皇太后とし、青綺門院と稱し奉つた。

マサキヨ　正清　加賀の刀工。加州住藤原正清と切る。天文頃。

マサクニ　正國　加賀の刀工。五代吉郎國平の門人。通稱押水甚藏。加州金澤住藤原正國慶應元年八月吉日又は明治元年霜月日などと切る。歿年不詳。

マサゴ　眞砂(マナゴ)　江沼郡九谷村の一部であるが、大聖寺藩では一村の取扱をしてゐた。茂恩紀聞に、この村は越前越智山の麓から田倉助兵衛といふ者が來住したに初るとある。眞砂は現に獨立の部落とするが、その内に口眞砂と奥眞砂とがある。

マサゴザカ　眞砂坂　白山御前岳の頂上に近い畜生谷の峽道を登り盡くす時は、石礫磊磊たる坂路があり、それを眞砂坂と名づける。越前名蹟考に『是(畜生坂)より一里の間極めて險し。眞砂坂といふ。權現の御花畠とて、色々の草花あり。』と記する。

マサゴヤマ　眞砂山　石川郡大野の西北にあつたといひ、佐良嶽とも、一に竿の林とも名づけた。往時大野湊神社卽ち佐良嶽明神がこゝにあつた。

マサシゲ　正重　加賀の刀工。古刀期では正重と切り、元龜頃。新刀期では加州住藤原正重と切り、年代不詳。

マサトモ　正友　羽咋郡押水中庄に屬する部落。

マサハルコヘイダン　政春古兵談　六册。關屋政春著。著者が初め織田河内守に仕へた頃から、天正以降武功を顯した古老に聞き得たる諸合戰の說話を、延寶元年から七年にかけて輯錄したものである。この書には享保廿一年有澤武貞の書寫したものがあり、又別に武貞の抄出した古兵談拔萃二編があつて、互に出入がある。

マサムネナシモノ　正宗納子物　元祿中の產物書上鳳至郡のうちに『皆月村、正宗なし物、四月五月仕候。』と見え、又寶曆十四年の調書には、『皆月村、せわた・まさむね揖から云々。』と記する。まさむねは、芭蕉旗(カデ)魚の異名なるべく、なし物とは魚類の内臟全部を揖漬にしたものである。納子物の文字は、安永頃の舊記に用ひられてゐる。

マサムネヤシキ　正宗屋敷　金澤今の上胡桃町に在つて、延寶圖に古澤豐左衛門と記する。その子孫又右衛門の時、何人とも知れず袋入の刀を取次の者に與へ去つたが、刀商人などの持來つたものと思うて捨て置いた。然るに當時城内に正宗の刀紛失の事があつたので、調べて見ると正に又右衛門の預り置いたものであつた。又右衛門に曲事はなかつたが、屆方を怠つた等不念の廉によつて知行を沒收せられ、邸地は明屋敷になつて居り、人之を正宗屋敷と唱へ惡所として忌んだ。

マシマ　間島　鳳至郡藤波の内の小字。文應二年の諸橋六鄕目錄に『馬島、田數肆町四段』とあつて、諸橋・阿曾良・鹿亟・古君・宇出津と比肩する大村であつたが、今は藤波の散村となつてゐる。

マシマ　馬島　→マシマ　間島。

マジマケンキチ　馬島健吉　大聖寺藩の人。安政六年大坂の緒方洪庵の門に入つて醫學を習ひ、後金澤・江戸及び長崎に學び、明治元年藩費の補助によつて歐洲に航し、四年歸朝して金澤醫學館の敎師となり、爾後縣の醫務に從ひ、十五年歸鄕自營し、四十三年七月歿、享年六十九。

マジリザキ　まじりざき　一册。題簽に四季類題と冠し、まぢりざきと文字を誤つてゐる。慕柳舍車大の著で、四季草木のみの發句を類題別にしたもの。文化二乙丑三月學遠の序。文化二年仲夏蒼虬の跋がある、京勝田喜右衛門・勝田善助板。